

— 広 告 —



田村 善伸 (たむら よしのぶ)
金沢工業大学大学院工学研究科
機械工学専攻
博士前期課程一年
石川県立野々市明倫高等学校出身

チエアスキー・シミュレータ 臨場感をVR技術で探究。

KIT
キャンパス
レポート
文・杉村裕之

主に下肢に障がいのある人たちが、座席に固定したスキーで滑るチエアスキー。上級者だと、スピードは百キロを超える。そして、風を切り、雪煙を上げて滑走する躍動感に、VR型シミュレータでどこまで迫れるか。田村さんの探究が始まって一年が過ぎた。

その舞台は、専門分野を超えて学際的なチームをつくり、問題解決の実践とイノベーションに挑むKITのクラスター研究室である。VR型シミュレータの開発は二〇一九年にスタートし、現在、田村さんら三人が手がける実機で四代目となる。

担当する。心強いのは、チエアスキーをするメディア情報学科の学生の存在だ。彼女がシミュレータの臨場感や操作性の良しあしを、自身の経験に基づいてアドバイスし、チームで改善点を検討していく。

今年二月開いたクラスター研究室の成果報告会では、実機に試乗した日本チエアスキー協会役員から高い評価を得た。それは、滑走を擬似体験できるよう、座席下部に取りつけた大きな曲げパイプで機体を左右に傾ける構造や、アウトリガーと呼ばれる器具を両腕に装着して操作するという、新しい発想で実現したリアルさへの驚きでもあった。

とで、さらに臨場感が増した。指導にあたる鈴木亮一教授は、「各自が得意分野を活かし、互いを尊重して活動する様子がうかがえます。プレーヤーの要望にかなうチエアスキー・シミュレータに近づいてきていると実感します」と手応えを語る。

三月には、新潟県内にあるスキー場で試乗会を開いた。「五十人ほどが参加し、皆さんに楽しいと言っていたきました。今後、加速しても違和感のない映像を完成させるなど、課題を一つひとつクリアしていきます」と田村さん。異質な知のコラボレーションが、知の足し算を掛け算に変え、人間も成長させる。クラスター研究室にかかる期待値がなぜ高いのか、凡百の説明より雄弁な田村さんたちチームの成果と笑顔である。

金沢工業大学
石川県野々市市扇が丘七二
電話番号(〇七六)二四八一〇〇